

日本音楽学会国際研究発表奨励金(平成 24 年度)

発表実績および成果の報告

2012 年 9 月 18 日

和田 ちはる (東日本支部)

Hanns-Eisler-Tage September 2012 Berlin  
anlässlich des 50. Todestages des Komponisten  
Symposion *Eisler und die Nachwelt* 6-8. September 2012

#### ◆シンポジウム概要◆

作曲家ハンス・アイスラー (1898–1962) が 1962 年 9 月 6 日にベルリンで没したことを記念し、没後 50 年にあたる 2012 年 9 月 6 日に国際ハンス・アイスラー協会 Internationale Hanns Eisler Gesellschaft の主催で、本シンポジウムを含む音楽祭 Hanns Eisler Tage が開催された。シンポジウムは「アイスラーとその後世」と題され、9 月 6 日に行われた H. クローネス Hartmut Krones による記念講演ののち、9 月 7 日、8 日の 2 日間、ベルリン芸術アカデミーにおいて行われた。

このシンポジウムにはドイツ内外よりアイスラーの研究者が集まり、多様な観点から興味深い発表が行われた。シンポジウムのテーマから、アイスラーの受容や後世への影響を扱う発表が多かったが、冷戦の影響を強く受けたこの作曲家の受容は社会的・歴史的な視点と不可分であり、その意味でも、今回のようにさまざまな国や地域からの参加者によって構成される国際シンポジウムの持つ意義は大きいと考えられる。

#### ◆研究発表◆

タイトル : Kleine Rezeptionsgeschichte von Hanns Eisler in Japan

日時・場所 2012 年 9 月 7 日 Akademie der Künste, Berlin, Hanseantenweg 10

#### 要旨

日本ではハンス・アイスラーの知名度は一般にはまだそれほど高くないが、とりわけ「うたごえ運動」と演劇の分野において、彼の音楽は一定の影響力を持ち、その歴史に確かな足跡を刻んでいる。本発表ではこの二つの分野に注目して、日本におけるアイスラー受容の初期段階にあたる 1980 年代ごろまでの様子を紹介する。

アイスラーの音楽は、日本ではまず、労働運動のなかで受容された。それは 1931 年末のプロレタリア音楽同盟の演奏会での〈ハンコの歌 Stempellied〉に始まり、戦後はとりわけ初期の「うたごえ運動」において、反戦や労働条件の改善を訴える流れの中で、他のドイツの労働運動歌とともに取り入れられ、歌われた。歌集には、日本語訳を付されたアイスラーの闘争の歌、劇中歌、歌曲などを見ることができる。この活動への参加者数や層の広さを考えれば、この分野における受容は無視できない。

演劇の分野では、アイスラーの音楽はブレヒトの作品とともに受容されてきた。ブレヒト演劇は、日本では比較的長い受容の歴史を持つが、とりわけ 1960 年前後、日本における社会運動の高まりとともに一般の関心が高まった。音楽を伴うブレヒト作品を日本語で上演する場合、そこには音楽的に見て二つの流れがある。ひとつはオリジナルの音楽に日本語の訳詩を当てる方法、もう一つは日本語の訳詩に新しく曲を書く方法である。日本語は母音の多い言葉の特性上、同じ内容を歌うのに、一般にドイツ語のテキストよりも多くの音を必要とする。そのため、オリジナルの音楽を使う場合には、多くの場合、重要な部分のみを残したテキストの省略が不可避である。しかしその一方で、省略のない翻訳に新しい音楽をつけるなら、それは原語の作品とはほとんど別のものになってしまう。ただしその際に、アイスラーやデッサウの音楽的な手法を念頭に置き、その精神を受け継ぐことを試みた作曲家たちがいた。林光の『母 Die Mutter』のための音楽（1960）はその好例である。また 1980 年末には、複数の作曲家や音楽家の参与のもと、ブレヒトとアイスラーの『処置 Die Maßnahme』に、アイスラーのテキストと音楽の関係へのこだわりを可能な限り反映した邦訳の歌詞を当てて上演する試みが行われた。アイスラーは歌曲一般において、常に音楽と言葉の関係に細心の注意を払っている。そのため、歌詞の翻訳には言語的および音楽的な知識が不可欠である。

ブレヒトのテキストを翻訳する場合、大きく分けて、原語に忠実な翻訳と、ブレヒトの社会変革の意図により重きを置いた意識の二つの方向性がある。林は後者の方針に従ってしばしば自らアイスラーの音楽のための訳詩を作ってきたが、彼の場合、この活動はやがて、ブレヒトやアイスラーの意図および作曲手法を受け継ぎ、それを日本語で一から実践するという、新しい別な創作過程へとつながってゆく。テキストと音楽の緊張関係の訳詩における再現の限界を考えると、彼にとってそれは自然ななりゆきであった。

1980 年代には、演劇の領域におけるアイスラーの音楽の受容と並んで、アイスラーの他の音楽作品にもしだいに関心が寄せられるようになり、いくつかの演奏会も企画された。それらを機に生まれた林によるアイスラーのための二作品《ハンス・アイスラーへの感謝》と《〈ナチ〉ニモマケズ》には、アイスラーへのこの作曲家の共感を明確に示すきわめて興味深いものである。

このような受容はいわば第一段階である。若い世代の研究者は、ブレヒトやアイスラー

がその時代精神にかなっていた時期を直接的には知らない。今日私たちは、この第一段階の受容を今日に至る歴史の流れの一部としてとらえ、それを学問的な立場から扱うという段階にある。

#### ◆発表体験記◆

発表はドイツ語もしくは英語という規程であったが、シンポジウムの発表自体はすべてドイツ語で行われ、質疑の一部に英語が用いられた程度である。発表時間は 20 分と短かったが、日本の事情は多くの聞き手にとってなじみのないものと思われたので、本発表ではパワーポイントを利用し、人名など聞き取りにくいと思われる言葉を視覚的に補足すると同時に、短い映像と音楽を併用してわかりやすい発表を心掛けた。アジアからの参加者はひとりだったこともあり、全体として予想以上に大きな関心を寄せてもらうことができ、質疑の時間を超えて多くの質問や感想をもらうことができた。

日本における受容は発表者のこれまでの研究の中心テーマではなかったため、今回は発表の準備に当たり、演出家および評論家の方々にインタビューという形でご協力をいただき、そこから多くの貴重な示唆を得た。本発表ではそれらすべてを活用することはできなかったが、発表者自身の研究の視野を広げるという意味でも非常によい機会を与えられたと思う。ぜひ今後のために生かしていきたいと考えている。